

基調報告

第57回全道へき地複式教育研究大会檜山大会

研究部長 長畑 一幸



大会参加者のみならず、保護者等にも理解される研究内容にすることが大切であると考えます。

準備期間が必ずしも十分とは言えず、各校の研究主題の設定や研究推進に関わる作業が大変でした。特に研究主題の設定などは、前年度の研究の反省や経営方針等を柱にしながらかつていかなければなりません。さらに、北海道へき地・複式教育研究連盟が提示している課題との整合性を図ることも求められました。

話し合いを十分持つことも大切でしたが、その根拠となる資料を準備することが最も重要であると考え取り組んでまいりました。大会スローガン「新しい歴史を拓く檜山の子どもに豊かな心と確かな学力を」のもと第57回全道へき地複式教育研究大会檜山大会は、第7次長期5か年研究推進計画の研究成果と課題をまとめ、第8次長計への展望を語り研究を推進し、取組を進めてまいりました。

そして、実行委員会の縦と横の連携・協力、報告・連絡を密にし、組織を機能させながら共通理解を深め、次の2点に研究推進の要点をおいてきました。

1点目は、研究の課題と成果を明確にし、各校がどのような実践を発信するか明らかにする。

子どもは授業によって育てられます。学校の不易の課題である授業力向上を2点目とし、その柱を、「問題解決的学習」の指導過程と「個に応じた指導」におき、取り組んでまいりました。

【終わりに】

私たちの取組は、些細な発信ではありますが、檜山の子どもたちと全教職員そして全教育関係者のこの上ない教育財産とするため、本教育研究大会の成果と課題を第8次長計への橋渡しとして、少しでもつなげていきたいと考えております。

多くの先生方より7分科会の研究協議において、へき地・複式教育の充実・深化に向けて貴重なご助言・ご意見をいただきました。

ご参加された全道の皆様にご心より感謝とお礼を申し上げます。

【檜山へき地・複式のあゆみ】

檜山におけるへき地・複式教育研究は昭和26年に始まりました。

その間、1学期には複式実践講座を、2学期には、管内研究大会を開催し、へき地・複式教育に対する理解と実践研究の充実に当たってまいりました。

檜山管内を会場にした全道へき地複式教育研究大会は、昭和56年、平成6年、今年度と3度目になります。北海道南西沖地震1年後に開催された平成6年第43回大会においては、へき地複式教育を進める上で大きな指針となる貴重なご意見と共に、地震災害復興への力強い励ましもいただきました。

【檜山管内の実態】

時代の変化に対応しながら、実践研究を積んできた檜山へき複連の研究ですが、この間社会の環境は大きく変化してきました。

科学技術の進展、高度情報化社会の到来など、生活環境は、大きな影響を受けてきております。

また、急激に少子高齢化が進み、学校の統廃合が加速し、現在檜山管内は小中学校あわせ47校となっています。

しかし、目の前に一人でも子どもがいる限り、義務教育の基盤を揺るがすことなく、へき地3特性(へき地・小規模校・複式形態)と学校を取り巻く「少人数だから伸ばせる教育」「自然や地域を取り込み、へき地だからできる教育」という多くの先人・先達による積み重ねられてきた特色ある根拠を毅然と受け継ぎ、教育活動を邁進させていかなければならないと考えます。

今一度、学校のおかれた諸条件・状況を自校の教育の中に積極的に生かし、教育課題の解明や解決が図れるよう学校教育の充実を目指すことが、新しい歴史を拓く基盤と考えます。

【檜山大会の位置づけと具体的な取組】

本大会は、このような状況下と大きな変革期での研究大会です。

全ての学校職員、地域・保護者、教育関係者に共通した「責任と願い」を実現していく取組が本教育研究大会の所期の目的であります。

その具体的な実践発表が授業であり、大会関係者、

(2) 研究内容Ⅱ

「量感や技能、考える力を育むための算数的活動の工夫」～「量と測定」「図形」領域を中心として～

○子どもの興味・関心や実生活との関連を生かした算数的活動の工夫○五官を使い、量感や技能を育む算数的活動の工夫○互いの考えをもとに、よりよい考えを育む算数的活動の工夫。

3 公開授業

低学年、1年生は「かたちあそび」、仲間分けはできていたが、名前を付けるのに苦労していた。2年生は「形に名前をつけよう」、三角形と四角形の定義をおさえられた。中学年、3年生は「箱をつくろう」、向かい合った面という語句を児童が知っており、その性質についてスムーズにまとめられた。4年生は「広さを調べよう」、広さの比べ方を考える授業。タイルを使ったのは有効でうまくまとめられた。高学年、5年生は「面積の求め方を考えよう」、児童はすすんで学習していた、6年生は「立体のかさの



高学年の授業(6年生)

表し方を考えよう」、1立方メートルの立体を実際に組み立てることにより量感を実感させることができた。

4 研究協議

○大会研究主題や現行学習指導要領、新学習指導要領及び会場校研究主題との整合性や関連をしっかりとふまえた研究内容でした。

○新学習指導要領では算数的活動について内容の改訂があり、今後の取組を期待したい。

○個に応じた指導と算数的活動は指導過程と指導内容の重要なポイントであり、もう少し具体的に工夫が考えられる。研究推進、研究内容についてはよい評価を受けました。

分担しながら読んでいった。みんなで作り上げることの楽しさを味わいながら、身振りなども付け、工夫して発表していた。

公開授業③ 5年国語「討論会をしよう」

テーマから一方を選択し、根拠や理由をはっきりさせながら討論会を行った。相手の意見や反論をよく聞きながら、自分の意見をもつという活動を積極的に行っていた。

公開授業④

6年国語「パネルディスカッションをしよう」

司会、パネリスト、フロアと役割分担をはっきりさせ、話し合いが進められた。お互いの考えの違いやよさを認め合いながら、話し合う楽しさを味わっていた。

4 研究協議

授業者の反省の後、討議の柱をもとに論議が交わされた。音楽科では、各学年の発達段階に応じた活動の工夫やリーダーが中心とした話し合い活動を取り入れている点が話題として挙げられた。国語科では、5・6年生を単式の授業で行っていることについて、また、両校での共同研究のあり方について話し合われた。

第7分科会

今金町立種川小学校

1 研究主題

「すすんで学ぶ子どもをみざして」～「量と測定」「図形」を中心とした算数科指導を通して～

2 研究内容

(1) 研究内容Ⅰ

「子どもの問題解決力を高める手立ての工夫」
○子どもが取り組みの目的をつかめる手立ての工夫○子どもが取り組みの見通しを持てる手立ての工夫○子どもが困ったときに自分で対応できる手立ての工夫○子どもが自分の取り組みの結果を確かめたり、ふり返えられる手立ての工夫。